

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

国立民族学博物館研究報告別冊 no.011; 序論：
資料と方法：はじめに

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大林, 太良 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/3493

第 1 章

序 論 —資料と方法—

I. は じ め に

大 林 太 良*

本報告書は、昭和56年度から62年度にかけて、国立民族学博物館において実施された共同研究の成果をまとめたものである。また、本研究は文部省科学研究費補助金を得ておこなわれた。つまり、昭和57年度から59年度までは「東南アジア・オセアニアにおける文化クラスターの構成と分析」(文部省科学研究費補助金 総合A57310045)、昭和60年度から62年度までは「東南アジア、オセアニアにおける文化の地理的分布とクラスター分析」(昭和61, 62年度文部省科学研究費補助金 総合A61301038)として、ともに大林太良を研究代表者として継続的に一貫した方針のもとに共同研究が進められた [ANONYMOUS 1983 参照]¹⁾。

東南アジア大陸部(ガンジス川以東、また中国南部少数民族も含む)および島嶼部からオセアニアにかけての諸文化の間には、共通性、連続性とともによく多くの地域差があることは従来からも知られていたが、本格的な分析はまだおこなわれていない。これを体系的に究明しようとするのが本研究の目的である。

これをもうすこし具体的にいうと、われわれの共同研究の目的は四つあった。

第1の目的は、東南アジア、オセアニアについての民族誌的データバンクを創出することである。たしかに世界的な規模における民族誌的データバンクがすでに存在している。もっともよく知られているものを二つ挙げれば、一つは The Human Relations Area Files (略称 HRAF) であり、もう一つはマードック (Murdock, G.P.) の *Ethnographic Atlas* [MURDOCK 1967; MURDOCK 1981] である。それらの価値と有用性については異論の余地はないものの、これらはわれわれを完全に満足させ

* 東京大学教養学部

1) 本報告書作成にあたっては、本共同研究参加者諸氏の協力、ことにワークシート記入の労に負うところが多いことを記し、ことに筆者の要請に応じて、コンピューテーションを行って下さった杉田繁治教授、また、原稿作成にあたって貴重な助言をよせられた秋道智彌助教授に感謝の意を表したい。

また第3章の基本的な部分は、大林がパリの社会科学高等研究院 École des Hautes Études en Sciences Sociales において1988年4月19日と5月3日におこなった講義に基づいている。同講義の機会を作って下さり、かつ貴重なコメントを寄せられたコンドミナス (Condominas, Georges) 教授にお礼を申し上げたい。なお、同講義に基づいた仏文論文は、グロリエ (Groslier, Philippe Bernard) 記念論文集に発表される予定である [OBAYASHI 未刊]。

るものではない。事実、前者はコード化された資料ではなく、生の資料を項目別に分類したものに過ぎない。後者についてはなるほどコード化されたデータを提出しているものの、項目の範囲がかぎられている。おまけに、項目選定は社会組織にかなりかたよっていて、物質文化の大部分を無視しており、さらにその他の文化の部門もひどく軽視されている、という状態だからである。

以上のようなことが、われわれを共同研究に踏みきさせた理由の一つである。

われわれは、文化の各部門からかなり広範に抽出した343要素(項目)の表を作製した。われわれの元来の計画は、東南アジア(華南少数民族およびマダガスカル島民をふくむ)とオセアニアのなかから選んだ237民族について、これらの項目の有無を調べてコンピュータに入力することであった。資料として用いられたものの大部分は、それぞれの出版されている文献であるが、少数の場合については共同研究者あるいは協力者自身のフィールド資料を用いた。1987年6月までに188民族の資料が入力され、中間報告の基礎となり、1988年2月までに入力された237民族の資料が、以下本報告書において、論ぜられる分析の基礎となった。

われわれの第2の目的は、統計的な方法を用いて、東南アジア、オセアニアの諸文化を分類することである。

東南アジア、オセアニアの文化の分類は、多くの人類学者によって、さまざまな立場から試みられてきたが、その大部分は直感的なものであった。1930年代に若干の統計的分類が行われたが、それらは地域的にも限られたものであったし、また物質文化あるいは社会組織というように、特定の分野をとりあつかったものであった[DRIVER and KROEBER 1932; MILKE 1935; von FÜRER-HAIMENDORF 1934; RUTIL 1936]。けれども誰一人として東南アジアとオセアニアの文化をその全域にわたり、また文化のおもな分野すべてを包括して統計的手段によって分類することを試みなかった。本研究は、この状況を改善するためのわれわれの努力の結果である。

われわれ自身が資料の集成に着手する前に、われわれは既成のデータをもちいてパイロット・スタディを一つ試みてみた。そのデータは、東南アジア島嶼部とマレー半島の10民族につき、80文化要素の有無を記載した表であって、コール(Cole, Fay Cooper)の『マレーシアの諸民族』[COLE 1945]から採った。杉田はこのデータに基づきこれら文化相互間の、密接な関係を示す図と疎遠な関係を示す図とを作製した。同様に文化要素間の密接な関係についても計算がおこなわれた。これらの結果は、これら文化の暫定的分類と若干の仮設的な文化複合の設定を可能にした[大林・杉田1984]。このパイロット・スタディのとき得られた経験を生かしてわれわれはデータ

集成にむかったのであった²⁾。

本共同研究の途中において、私は1987年9月に東京で開かれたインド・太平洋先史学会議において、中間報告をおこなう機会があった。150民族、100要素のデータにもとづいて、東南アジア、オセアニアの文化の樹状図をつくり、それを文化の因子分析で検証したものであった [OBAYASHI 1987]。こうして得られた分類は、もっともなものであったが、今回の本研究の結果とくらべていくつか興味深い相違もあった。それについては、第4章3節で論ずることにする。

われわれの共同研究の第3の目的は、要素間の相関関係にもとづいた研究を奨励することである。要素間の関係、ことに二つの変数の間の相関関係は、ことに通文化研究の専門家によって、計算され、解釈され、多くの論著が公にされた。けれども、第2章におけるわれわれの試みは、従来の通文化的研究とは二つの重要な点において相違している。

第1の点は、これらの研究が対象とした地域の範囲にかかわっている。われわれの研究は、東南アジア・オセアニアという地域で、要素間の相関関係を明らかにしようとするのであるが、伝統的な通文化的研究では、全世界の主な民族を対象としている。ところが、この二つの変数の間の相関関係は、大陸ごとに相違していることが周知のところである [DRIVER and SCHÜESSLER 1967; BOURGIGNON and GREENBAUM 1973]。したがって、われわれは、要素間の相関関係を世界大的な規模ではなくて、地域的な規模で実施するのは、極めて適切なことと考えている。

もう一つの相違は、要素間の相関関係の解釈に関している。伝統的な通文化研究は、ふつう二つの変数の間の機能的な連合を証明することをねらっている。われわれの場合は、たんに機能的な連合ばかりでなく、同一共通母文化から遺された遺産とみるにせよ、1文化から他の文化への伝播とみるにせよ、何らかの歴史的な由来にもとづく連合関係にも関心をもっている。大多数の場合、父系出自と父系居住のような機能的連合よりも、「父方居住と巻上げ式籠編みとの関係」のような非機能的な連合 [DRIVER 1973; 338, 339] である。このような非機能的関連は、機能的な適合の結果よりもむしろ、歴史的な過程の結果として解釈されるべきである。

要素間の相関関係の歴史的、および機能的な解釈を採用する点において、われわれ

2) われわれのデータは、マトリックスの形でも、また分布図の形でも利用できる。いうまでもなく、われわれのデータベースは決して完全なものではない。私はこの不十分なことをよく承知している。たとえば、民族のなかに南フィリピンのイスラム系民族が入っていない。さらに文化によっては、第一級の資料が利用できなかったが例もある。たとえば、Jaraiについてはドルヌ (Dournes, Jacques) の概説 [DOURNES 1972] が入手できず、不十分な資料に頼らざるを得なかった。

の立場は、ドライバー (Driver, H. E.) が北米インディアンの研究においてとった立場 [DRIVER 1956; 1966; 1970] にきわめてちかい。

われわれの第4の目的は、統計的処理のさまざまな技術を試してみることである。たとえばわれわれはデータをクラスター分析してみたが、つぎに、そのおなじデータを因子分析してみた。従来の統計的研究は、ふつうこれら二つの方法を一緒にもちいていない。この一方だけしか使わないという方法論は少し前ならデータ処理の経費がかさむ、ということで説明できた。しかし、近年における技術進歩のおかげでデータ処理は、以前ほど高価でなくなってきている。さらに、経験によってわれわれは二つの分析の結果をつき合せてみるのが、きわめて実り多い手続きであることを学んだのである。

謝 辞

本共同研究の遂行、本報告書の完成にあたっては、多くの機関や人たちの好意と協力と激励に負っている。まず科学研究費補助金をもって、この研究を可能にしてくれた文部省学術国際局研究助成課、この共同研究に支援をおしなかつた梅棹忠夫館長以下の国立民族学博物館の関係者各位、また本研究の参加者、ワークシート作成に協力された方々、そしてこの共同研究と報告書作成の事務を担当された方々に、この機会をかりて心からの御礼を申し上げたい。